
剣士と姫君と魔のある世界

シャルル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣士と姫君と魔のある世界

【Nコード】

N3893Z

【作者名】

シャルル

【あらすじ】

とある世界のとある青年の物語。

青年はかつてナンバーで呼ばれる特殊な部隊の一員だった。

そんな彼が一人の少女のために部隊を裏切り

少女を助け、仲間を殺した。

6年後、少女は美女へと成長し、少年は長く伸びた黒髪を持って、異国の地で学友に囲まれながらかつての自分を隠すように暮らしていた。

この作品は二人の少年少女らの長きにわたる物語を記す、長編ファンタジー作品です。

少年と少女

純白の月が、天高く夜空を照らし、深き森の葉のカーテンの下へと糸のように

漏れ出ていた。

それらの光を頼りに、少年は喉を突く冷気を深く吸い込み、夜の森を駆ける。

息は徐々に荒々しく、足取りも重くなっていく。

少年ルイス・アルバーンは、息を凍らせ、足を酷使して、雪の森を

小さな少女を抱え、背後に迫る気配に注意を払いつつ走っていた。抱える少女は貴族のドレスを纏い、白く透き通るような肌と桃色の頬をした幼き10歳ほどの小さな少女。

少年はそんな少女を羽織っていたローブで包むと、道中に目に入った

穴に白い吐息と共に押し込んだ。

「しばらくここに隠れていてくれ……僕には君を守りながら戦うのは無理だから、でも……絶対に君を守ってみせるこの命に変えてでも……絶対に」

ルイスは少女の眠る穴を屋根のように厚みのある雪を崩し入り口を雪の壁で塞ぐと再び駆け出した。

月明かりに照らされるルイスの体には、多くの血が媚びれついていた。

しかしそれはルイス自身の血ではない。ここまでに傷つけてきた仲間の血

少女を助ける代わりに少年は大きな犠牲を払ったのだ。

友を救うか、仲間と共に友を殺すか。そんな苦渋の選択をルイス

は求められ

そして決断した。ルイスは友を選んだのだ。ナンバーだけの呼び合いでしか

会話をしたことのない仲間を捨て、名前を、偽りなき言葉を交わした

少女のためにルイスはすべてを捨てる覚悟で仲間を斬った。

- - -後悔は無い……

四方を黒色のローブを纏う仮面をつけた者たちに囲まれ、退路を失ったルイスは

腰にかけていた紅色の鞘から剣を抜き、強く握り締めると、冷たい吐息と共に

言葉を漏らした。

「長い間お世話になりました、隊長……。僕は今日で隊を抜けます」

ルイスの言葉に東に立っていた男が一步前に足を進め両手に剣を構えると、鼻で笑い、その言葉を切って捨てた。

「ナンバー01。仲間を斬り殺し、我々の標的までも奪い去ったお前を

このまま黙って見逃すとも思っているのか？」

男はルイスの目を見据え口元を僅かに緩ませると、さらに言葉を漏らした。

「その目は違うな、逃げる目ではない。獲物を食い殺し、仕留める目だ。

だがなあ、いくらナンバー01の実力を持っていようと、ここに

いるナンバー

一桁の猛者たちはそう安々殺られはせんぞ？ なによりナンバー
00のこの私が

いるのだからな」

男の血の赤のように鋭く殺気のおふれる眼をルイスは見据え、片
手で剣を

構え、殺気を全身纏わせて臨戦態勢の構えをとった。

ピリピリと全身に突き刺さる四方から向けられる殺気に当てられて
全身が寒さにふるえるように振動し、同時に胸の奥底で心臓が何
度も鼓動を耳に響かせる。

「同時にやるぞ！ 1…2…3…」

赤色の瞳の男が数字を口にした瞬間、一斉にローブを纏いし殺し
屋が行動に出た。

ルイスも同時に剣を宙へと振るう。

……

……

……

それは一瞬、刹那の出来事だった。

四人の者たちが一人の少年に切り裂かれ、声も上げず死ぬことも
悟られず

永遠の闇へと落ちたのだ。

上半身から切り離された首が、無造作に雪の残る地面へと転がり
白色だった雪の色は徐々に赤色に染まっていった。

ルイスは腕に残る震えを片手で抑え、鞘に震える手で剣を収める。

「誤りませんよ……僕は貴方たちの命を背負って生きて行きます。だから、どうか……安らかな眠りを」

ルイスは男たちの屍を背にして雪を踏む音を上げながら冷たい夜の森へとその姿を消した。

半日と立った頃、少女はルイスに引き連れられ、王国の管理する修道院に預けられた。

古くから王族の娘や貴族の娘は10歳の誕生日と共に修道院に7年間入り、身を清める

ことが習わしとされてきた。彼女の暗殺命令もその気に乗じて遂行される予定だった。

それをすべて破綻させ、ルイスは命がけで少女をここまで連れてきた。

閉ざされる門の先を見据え、ルイスは小さくつぶやいた。

「僕の大切な友達……僕のことを名前で読んでくれた大切な友達
これでさよならだね……叶うのなら、また遠い未来、君に出会
えたらいいなあ……」

悲しげな表情で、抱きかかえられる少女見据えて、ルイスは体を
翻し

その街を足早に去っていった。

学園生活

「ルイスく発見！」

背のあたりまで伸びる黒髪に、黒と白の線の入った少し風変わりな服を

着た青年が、手入れされた芝生の上で、大きく背を伸ばしながら体を起こすと

視界に声の主が飛び込んでくる。

海のように青く輝いて見える瞳に、綺麗に切り揃えられた前髪

上着は青年のつけている物と同じものだったが、彼女はズボンではなく

三本の白と黒の線が上下左右に走るフリルの付いた可愛らしいスカートを履いていた。

学園では女子はスカート男子はズボンと性別をわかりやすくするために今の

服装になったそうだが、そう入学式の時に校長自ら言っていた。

しかし、フリルの付いたスカートに関しては校長の趣味だという噂がある。

彼、ルイス・アルバートはそんなヒラヒラのスカートを見据え胸に赤青緑の厚い本を抱く、少女を見据えてあくび混じりに言葉を返した。

「はぁーあ、昼休憩くらい俺を安らかに眠らせてくれよ……」

ルイスは片目を僅かに閉じて彼女の頬を撫でてそう漏らした。

それに彼女は頬を赤らめ、数秒間硬直のすると、突如我に帰ったように

素早く本を握る手ではなくもう片方の空いている手で、ルイスの手を弾いた。

「くう……どうしてアンタはいつも、そんな顔で私を見るのよ！もしかしてアンタ……私の事が好きってことないわよね？それだったら……」

「ああ、それは絶対に無いから安心してくれ」

彼は彼女の言葉を彼女が言葉を言い切る前に即答した。

それに彼女は眉間に皺を寄せ、今にも襲いかかってきそうな形相で拳を握り、それに息を噴きかける。

同時に彼女はこう呟いた。

「……私の乙女の心は今ここで大きく傷つき、そして新たな一步のためにあなたの血を欲している。だから、ルイス……ここで死になさあーい！」

それは魔女のような呟きだった。

彼女は黒髪を風に乗らせ、しっかりと片手に本を握りしめ、空を切る右手で

ルイスの顔面に向けて細い腕を走らせた。

それを彼は逃げることも避けることもせず、其場にただ立ち尽くし訪れるで有ろう衝撃に備える。

ルイスは彼女の動きをすべて見切っていた。

彼女の拳の動きもどこへそれは向かって来るのかも、だが、彼は回避それをしない。

ここでの彼は、運動能力の乏しい怠け者学生を売りに生活していた。

だからこそ、避けるのは不自然、避けられないが普通。

学園に入学した時、彼は自分を偽ることに決めたのだから。

ルイスは虚ろな目で彼女の目を見据え、顔面に向かってくる禍々しい気配を放つ拳を今か今かと首を閉められるような思いでじっと待っていた。

しかし、後わずか、後ほんの僅かの距離で、彼女は両目を閉ざし拳もそれと同時に方向を変え、ルイスの腹にねじ込まれる形で激突した。

同時に腹に釘でも打たれたような痛みが広がり、思わずルイスは苦痛の声を

上げると、腹を抑えこみ地面に跪く形で倒れ、片目を閉じた状態で上の方向に
めをやった。上にはそっぽを向く彼女が写り込んでいた。

「ハア……ハア、まず一言いいか？」

両手で三冊の本を大事そうに胸に抱く少女はルイスの声を聞くと細い眼で小さく言った。

「何よ？ 何か文句でもある？」

「大ありだ！ なぜ俺を殴った？」

「何故？ わからないの？」

「わからないから聞いているんだろっか」

彼女はいつもとは違う悲しげな眼で彼を見据え、背を向けて吐き捨てるようにして

かすれ声でこう呟いた。

「ルイスのバカ、バカバカバカ！ 大馬鹿野郎！ もう、ルイスなんて知らない！

バカ……」

彼女は足早に芝生の広がるグラウンドから校舎へと消え、見えなくなつた。

「なんだよ……ロイズの奴。会話の7割近くが馬鹿つて言葉だけだつたぞ？」

「いったい何が言いたかつたんだ？　と言うよりも……読書好きのあいつが

「昼休みの読書を投げ出してまで俺を馬鹿にしたかつたのか？」

「うーん……謎だな。冬眠する動物のようにアイツは謎だ……」

「まあーとにかく、もう一眠りするか」

彼女が、何故彼のもとに昼の読書タイムを削つてまで訪れたのか、それを

「知ることになるのは、彼が眠りについて、20分ほど後のことになる。」

赤点

古ぼけた空気、劣化や乾燥の及んだ無数の本、それらが左右に収められる

細い通路を抜けると、そこには己の存在を主張せず、影のように暗く人の目に触れないように

佇む小さな扉がある。

ルイスはその扉に手をかけ、そしてその先へと足を進めた。扉は音を立てて開かれた。

独特の木がしなる音と共に。

同時に彼は開かれた扉の先に目を向けた。

部屋の中には3つのソファールとテーブル、壁に木の板を打ち付けた粗末な本棚があり、質素な空間を作り出している。

ルイスはその部屋をよく知っている。

ある時期、ある問題で彼はこの部屋に呼び出されるのだ。

今日も昼休憩の終わりと共に呼び出された事を知って

こうして最上階にあるこの部屋に出向いたのだ。

呼び出しを食らったのは20分ほど前らしい。それを伝えるように頼まれたのが

ロイズだったらしい。しかし彼女はそんなこと一言も口にせずただ現れただけで、言いたいことだけ言って去っていった。

彼女は連絡係だったはずなのに、それをしなかったのは個人の感情が

それを躊躇させたのだろう。あの時の彼女はどこか様子がおかしかった。

ルイスはそう思いつつここまで来た。

窓越しにある木製の古めかしい椅子には、一人の老人が部屋の主

かのように

座り込み、羽ペンを机に走らせ業務に勤しんでいた。部屋に入るやいなや、その老人は入り込んできたルイスを見据えずかに微笑むと、ソファアに座るように言った。ルイスがソファアに腰を落ち着かせるのを老人は確認すると続けるようにしわがれ声でこう漏らした。

「ルイス君、なぜ君がここへ呼ばれたのかわかるかね？」
「いえ……全く」

ルイスは首を左右に振って、老人の言葉に答えると老人は走らせていたペンを止め、無数に文字の表記された一枚の紙をテーブルの上に差し出してきた。それを彼は手に取り内容を確認すると、表情を曇らせた。

「補習……ですか？」

老人の背後から漏れる太陽の暖かな陽光を半身に浴びながらルイスは紙から老人の顔へ視線を移すと、老人は嫌味なくらい満面な笑みでこちらを見ていた。彼はそれに微笑みを持って返した。

「そうじゃ、だが不思議じゃのおー入学試験の成績はその年の最高得点を記録したお主が、今では毎年赤点ばかりとっている。不思議なことにすべてのテストで29点先生方が言っていたよ、彼は一体どうして赤点を取れるようにテストを行うのか、とね」

「先生方は私を買いかぶりすぎですよ？ 私なんて本当に能のない、ダメ人間ですから」

「能の無い……か、本当にそうかのおーワシには

自分を偽って学園生活を送っているように見えるが……」

「偽りなんてありません、私は私ですから。それよりも
今回の補習はどんな内容何ですか？」

「ああ、簡単じゃ。ここから南へ数キロ行った場所にある
街に出向いて、魔物退治をしてきてくれ。それで運動系と

魔法系の赤点は解消される手はずになっている。後はまあー

再テストになるだろうが、再テストは君ならすぐに合格するだろ
う」

「魔物退治のどこが簡単なのか、理解に苦しみますが、仕方ありま
せんね

行きましょう。で、いつその街へ出向けばよろしいのですか？」

「明日の朝、この学園を出発して欲しい。もちろん数人の生徒と
上級魔導師の先生をつけるので心配はない」

「わかりました」

「よろしく頼むぞ」

「はい、では失礼します」

「うむ」

ルイスはソファアールから立ち上がり、その部屋を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3893z/>

剣士と姫君と魔のある世界

2011年12月15日00時49分発行